



Title	ラフカディオ・ハーンにおける混血人種表象：「真夏の熱帯行（“A Midsummer Trip to the Tropics”）」を中心に
Author(s)	舞, さつき
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 27-38
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/54334">https://doi.org/10.18910/54334</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ラフカディオ・ハーンにおける混血人種表象

——「真夏の熱帯行（“A Midsummer Trip to the Tropics”）」を中心に——

舞 さ つ き

## 1. はじめに

グローバル化が進む現代世界の社会や文化において、その裏側で起こるハイブリッド化やクレオール化という概念が重要視されてきている。ラフカディオ・ハーン（1850-1904）は小泉八雲としても知られる作家であり、日本で広く親しまれているが、1890年に来日する前にも、アメリカのシンシナティやニューオーリーonz、そして仏領西インド諸島のマルティニークで多くの作品を残している。ハーンは、クレオール言語や雑種化された文化を記録した初めての人間のひとりであると言われており（平川 2009 : 18）、没後 110 年にあたる 2014 年 7 月 4 日には、彼の生誕地であるギリシャ西部のレフカダ島で「ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター」がオープンした。欧州でハーンの展示施設が開設されるのは初めてのことであり、翌 7 月 5 日には、国際シンポジウム「ラフカディオ・ハーンの広い心（オープンマインド）—西洋から東洋へ—」（*The Open Mind of Lafcadio Hearn : His Spirit from the West to the East*）が開かれ、日本、ギリシャ、アイルランド、マルティニーク出身の研究者などがハーンの人生や思想について発表した。この催しは 2014 年 8 月 6 日付の朝日新聞にも掲載され、そこではシンポジウムのタイトルの意味が次のように紹介されている。「西欧の列強が植民地支配を広げた 19 世紀末に、日本など『辺境』の土着の文化を偏見なく受容した生きざまが『オープンマインド』と評されている」（『朝日新聞』2014.8.6）。このように、没後 100 年以上の時を経た現在、ラフカディオ・ハーンの人と文学は再び注目されつつあると言える。

しかし、ハーンの日本時代の作品については数多くの研究がなされている一方、それ以前の作品に関する研究は決して多くはない。中野稔は、「近年の研究を通じて、日本の専門家という枠に収まらないハーン像が浮かび上がった。クレオール、ポスト・コロニアリズムなど、今日の文学、思想の最前線に通じる視点を持っていたといえる（『日本経済新聞』2004.7.31）」とハーンを評価している。ニューオーリーonzや西インド諸島滞在時期の彼の作品には、クレオール（特に女性）についての記述が数多く見られる。本稿はこれらの記述に注目し、「真夏の熱帯行（“A Midsummer Trip to the Tropics”）」を主な対象として、これらのテキストに見られるハーンの混血人種表象を分析・考察していく。

## 2. ハーンの「混血性」

パトリック・ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn) は 1850 年、チャールズ・ブッシュ・ハーン (Charles Bush Hearn) とローザ・アントニオ・カシマチ (Rosa Antonio Cassimati) のあいだに産まれた。すなわち彼自身、アイルランド人の父とギリシャ人の母との混血の子供であった。高瀬彰典の『小泉八雲論考』によれば、彼は自分の人生の悲劇はすべて父親に原因があると思ひ込み、生涯母親を理想化し、その浅黒い肌や茶色い瞳を好んでいたという。このような心情は、彼が弟のジェイムズにあてた手紙にも表されている。

「私の魂は父とは無縁だ。私にどんな取り柄があるにせよ、そして必ずや兄に勝るはずのお前の長所にしても、すべては私たちがほとんど何も知らない、あの浅黒い肌をした民族の魂から受け継いだものだ。私が正しいことを愛し、間違ったことを憎み、美と真実を崇め、男女の別なく人を信じられるのも、芸術的なものへの感受性に恵まれ、ささやかながら一応の成功を収めることができたのも、さらには私たちの言語能力が秀でていいるのも (お前と私の大きな眼はその端的な証拠だが)、すべてはお母さんから受け継いだものだ。」(高瀬 55-56)

そのため彼は、母の国ギリシャを東洋的と見なして東洋に憧れを持ち続け、反対に父親が代表するかに思えた西洋を嫌悪した。また、生涯東洋にあこがれを抱き続けたハーンはクレオール的女性に魅了され、作品にも数多く登場させている。シンシナティ、ニューオーリーズ、仏領西インド諸島マルティニーク、そして日本へと放浪の旅を続け、ハーンは 54 歳の時に日本でその生涯を終えた。

## 3. ハーンとマルティニーク

マルティニークはカリブ海の西インド諸島に属するフランス海外県の一つで、面積は 1,128 平方キロ、人口は 2013 年時点で 386,486 人の小さな島である。1635 年にフランス人のブラン＝デスナンビュックが上陸し、さらに 1658 年、フランス軍によるカリブ人大虐殺が行われ、この島のカリブ人は絶滅したと言われている。その後、黒人奴隷が大量導入されマルティニークの混血人口は急激に増加した。砂野幸稔の「エメ・セゼール小論」によれば、1660 年にはマルティニークの全人口が 5,310 人だったが、1701 年には白人が 6,961 人、黒人と混血人が 23,362 人になり、1751 年には、白人 12,068 人、黒人 65,905 人、混血人 1,413 人、さらに 1776 年には、白人 11,619 人対して、黒人 71,116 人 混血人 2,892 人と、全人口とともに混血の人々の数も増加していった (砂野 199)。

ルイ＝ソロ・マルティネルの「マルティニークにおけるハーン評価の変遷」では、アンテューク諸島におけるハーンを受容が以下のように分類されている。

まず第一に一九二〇・三〇年代の白人クレオールによる是認。第二に四〇・五〇年代のネ

グリチュード作家たちのオマージュ。そして第三に（これは厳密に言えば前後で二つの傾向に分かれるが、同一の人物たちによる）軽視と重視である。すなわち、六〇・八〇年代の軽視、逡巡、そして九〇年代以降のクレオール性論者たちによる再読と再評価である。（マルティネル 108）

西江雅之（2004）によれば、ハーンは日本では松江の小泉八雲と知られているのと同様、フランス語圏ではカリブ海域を書く作家として知られており、特にフランスではハーンに関する翻訳や研究が数多く行われ、それらの書物はマルティニークの書店にも並べられているという（西江 97）。また、恒川邦夫（2009）によれば、マルティニークのガイドブックには、ハーンが書き残した十九世紀末のサン＝ピエールの町や島民の生活についての記述を仏訳して掲載しているものもあり、彼が時代に先駆けてクレオール語コントの貴重な採取を残したことも、今日よく知られているという（恒川 56）。さらに、マルティニーク出身のエメ・セゼールは 1955 年に“Statue de Lafcadio Hearn”という詩をハーンに捧げている（マルティネル 104）。以上のように、ハーンの存命中から現在に至るまで、彼とマルティニークには様々な面で深い結びつきがある。

#### 4. 「真夏の熱帯行」

「真夏の熱帯行（“A Midsummer Trip to the Tropics”）」は、1890 年に出版された『仏領西インド諸島の二年間（*Two Years in the French West Indies*）』（以下 *F.W.I.*）第一部にあたる、三十三章からなる紀行文である。『小泉八雲論考』によると、ハーンは 1884 年の夏に休暇を取り、グランド島を訪れた。そこで熱帯の生活に関心を持ったハーンは 1887 年 5 月末に新聞社タイムズ・デモクラットを辞め、ニューヨークに数週間滞在した後の 7 月上旬に西インド諸島へ独自取材旅行のため向かった。「真夏の熱帯行」はこの 7 月からハーンが二か月間行った取材旅行中に書きためたノートに基づいて執筆されたもので、「その場その時の心と目に映じた印象」（“the visual and emotional impressions of the moment” [Hearn, “A Midsummer”, viii]）を記録している。この原稿で 700 ドルを手にしたハーンは、さらにその後 1887 年 10 月から 1889 年 5 月の約一年七ヶ月の間マルティニークに滞在することとなる。すなわち「真夏の熱帯行」はハーンが西インド諸島で約二年間を過ごす間に執筆した作品の内、初期の作品にあたる。三十三章からなる「真夏の熱帯行」の第三十二章までは、主に西インド諸島の風景や、そこで暮らす人々の外見や生活などを観察し、描写した紀行文であるが、帰航後の三十三章は雰囲気がからりと変わり、混血人種の内的な部分について言及している。最初こそ混血人種の外見的人種表象が多いハーン作品ではあるが、それ以降の作品においては内的人種表象も多く見られるようになる。次章からは「真夏の熱帯行」を中心に、ハーンの外見的・内的人種表象について見ていく。

#### 5. 「真夏の熱帯行」におけるハーンの外見的人種表象

ハーンのギリシャ人の母親は南国育ちで浅黒い肌に茶色の目をしており、彼がクレオール  
の女性に魅了されていたのは母親の存在が大きいと考えられている。彼が最初に結婚し  
たのは1874年のことだが、その相手もマティという名の黒人の混血女性であった。しかし  
オハイオ州では、1861年から1877年まで白人と黒人との結婚は法律で禁じられており、ま  
た、黒人だけでなく白人と黒人の混血人種も差別の対象であったため、彼は当時務めてい  
たインクワイアラー社を解雇されることになる。

このように、混血人種に強い魅力を感じ、白人至上主義の社会をあまりよく思っていな  
かったハーンではあるが、彼に黒人差別の面がなかったというわけではない。彼は「真夏  
の熱帯行」において、アメリカ領ヴァージン諸島の街の人についてこのように記している。  
“There are few comely faces visible,—in the streets all are black who pass.”(Hearn, “A Midsummer”,  
10) 他にも、海水浴を楽しむ人たちを彼は以下のように描写している。

Some very slender, graceful brown lads are bathing with them,—lightly built as deer: these are  
probably creoles. Some of the black bathers are clumsy-looking, and have astonishingly long legs  
(Hearn, *F.W.I.*, 11)

ここでハーンは、クレオールを“slender”、“graceful”と表現しているのに対し、黒人は  
“clumsy-looking”であると否定的な描写を行っている。他にも、黒人の船頭たちが半裸体で  
喚き身振り手振りする姿が“grate black apes”のように見える、という記述もある (Hearn, “A  
Midsummer”, 15)。また『西インド諸島の二年間』の第二部「マルティニーク小品」に収め  
られた短編小説の一つである「有色人の娘」には、次のような一節がある。

According to the Dominican missionary, the Africans then in the colony were decidedly repulsive;  
he describes the women as “hideous” (*hideuses*). There is no good reason to charge Dutertre with  
prejudice in his pictures of them. (Hearn, *F.W.I.*, 248)

すなわち、植民地のアフリカ人を「全く不快な (decidedly repulsive)」者たちと言い、黒  
人女性を「醜悪 (hideous)」と描写したかつての宣教師を、その偏見をもって非難する理由  
はどこにも見当たらないというわけである。

彼の黒人差別の側面は、2001年出版の『仏領西インド諸島の二年間』にラファエル・コ  
ンフィアンが寄せた「まえがき」(“Lafcadio Hearn: The Magnificent Traveler”)においても指  
摘されている。

Of course, Hearn was not totally free from the racial prejudices of his time (for example, he  
preferred to mixed-race people to “pure” black ones) and was inevitably influenced by contemporary  
Eurocentric racial theorizing and discourse. (Confiant 2001: xii)

コンフィアンがここで述べているように、ハーンが彼の時代の人種差別から完全に抜け出すことができていなかったとは確かであろう。また、ルイ＝ソロ・マルティネルの「マルティニークにおけるハーン評価の変遷」は、ハーンの混血賛美は黒人軽視と表裏一体であるという、『アンティュー諸島（カリブ）文学事典』を著したボルドー大学教授のジャック・コルザニのハーンへの批判を紹介している（マルティネル 109）。コルザニはさらに、ハーンを「悪質な人種差別主義者」、「エロチックな思考の強いエキゾチスム愛好家」と非難している。他の批評家たちからも、ハーンは辛辣な批判を浴びせられてきた。

しかし、マルティネルは、「辛辣な批評家たちがわざわざ見落とししたもの」として、1880年代の後半にハーンがニューヨークで書いた文章を取りあげ、彼がこのときすでに黒人の造形美に惹かれていたことを指摘している（マルティネル 111）。平川の「ハーンにおけるクレオールの意味」によれば、ハーンはアメリカでルポタージュ記者となった際に、白人だけでなく黒人にも関心を寄せており、それは当時としては非常に稀なことであったという。またハーンは、南北戦争後、オハイオ川流域の黒人の生活を最初に記録した作家ともいわれている（平川 2009: 27）。ハーンは 1876 年に雑誌『コマーシャル』で「黒人の寄席演芸—ロー街の芸人たち」という題の、居酒屋ピケットで行われる軽演劇についての記事で次のように執筆している。

六人の芸人は、一人を別にして、いわゆる黒人の特徴とされるものをもった本物の黒人である。だが、やたらにコルクの煤と顔料を用いて、本来の人相を誇張している。両端に立っているエンドマン（道化役）の口は、ともに耳にとどくほど大きく、目は怪物のようである。また、その服装はまともな芸人ならば思いもよらぬ代物であり、この種の芸では出色である。この点は、黒人の物真似をする白人芸のほとんどが及ばないところである。（ハーン 1987: 141）

以上のように、ハーンが黒人差別の一面を持っていたことは決して否定できないが、彼が黒人を完全に蔑視ないし軽視していたと断言することもできないであろう。

ハーンが彼の時代の黒人差別から完全に脱け出すことができていなかったことは前節で見たとおりである。一方、混血に対するハーンの様子は、同時代の多くの白人たちの態度とは大きく異なっていた。

杉本淑彦（2005）の「白色人種論とアラブ人—フランス植民地主義のまなざし」によれば、19 世紀以降の欧米社会では、ジョルジュ・キュビエの人種三分類法—コーカソイド、モンゴロイド、ニグロイド（エチオピア）—が広く受け入れられていた。そしてキュビエは、コーカソイドがもっとも優れていて文明的な民族であり、モンゴロイドの文明は常に停滞的であり、黒色人種を構成している種族は野蛮状態にとどまってきたと考えていた。さらにここから白色人種の中でも序列化が進んでゆく。以下は、19 世紀の半ばに白人至上

主義を提唱した、ジョゼフ・アルテュール・ド・ゴビノーの悪名高い『人間の不平等に関するエッセイ (1853-1855)』の一節である。

あらゆる人種のなかでもっとも美しいのは、ヨーロッパ民族が属しているグループである。他の人種の美の程度は、白人の血の混交度合いに応じる。セム人種は、白人の血の混交度においてヨーロッパ民族にもっとも近いグループである。しかし比較的少量とはいえ、黒人の血が混じっている。．．．．原初においては白色人種が、容姿の美しさと、優れた知力と体力とを、三つとも兼ね備えて専有していた。ところが、白色人種と他の種のあいだの性的結合が進み、美しいが体力のない混血、体力はあるが知力のない混血、あるいは、知力はあるが醜くて虚弱な混血が生まれた。(藤川 64-65)

ゴビノーは白人こそが一番優れていると考え、白人の血に黒色人種や黄色人種の血が混入することで人類全体が退化すると考えていた。19世紀後半のフランス思想界を代表する一人であるエルネスト・ルナンも、白人の中でもセム人種は劣った人種であると説いている。19世紀ヨーロッパのこのような人種観を踏まえるなら、ハーンが混血人種を好み、彼の『仏領西インド諸島の二年間』のほとんどが、混血の女性について書かれた作品で構成されていることは注目に値する。黒人を“clumsy-looking”と形容し、“great black apes”に例えていた彼が、そこでは、西インド諸島セントルシアの首都カストリーズに住む混血を“handsome”と表現し(“Castries, ....It has a handsome half-breed population” [Hearn, “A Midsummer”, 70])、海水浴を楽しむ混血人たちを古いブロンズ像に例え、その身体美を賛美している(“Some are a fine brown color, like old bronze. Nothing could be more statuesque than the unconscious attitudes of these bronze bodies in leaping, wrestling, running, pitching shells” [Hearn, “A Midsummer”, 11])。

ハーンは、特にマルティニークのサン・ピエールの街の住民については「西インド諸島の混血人種の中でも最も素晴らしい人種 (“the finest mixed race of the West Indies” [Hearn, *F.W.I.*, 20])」と述べている。さらにその中でも、「一つのたぐい稀な人種タイプ (“one rare race-type”）」に出会う。

There is one rare race-type, totally unlike the rest: the skin has a perfect gold-tone, an exquisite metallic yellow; the eyes are long, and have long silky lashes;—the hair is a mass of thick, rich, glossy curls that show blue lights in the sun. What mingling of races produced this beautiful type?—there is some strange blood in the blending, not of coolie, nor of African, nor of Chinese, although there are Chinese types here of indubitable beauty. (Hearn, *F.W.I.*, 26)

この“one rare race-type”は、他の混血人種とは全く違う“beautiful type”であると彼は言う。そして、この美しいタイプの人種はどのようにして生まれたのだろうかとハーンは疑問を投げかける。この疑問は、マルティニークの名医で、アンティル諸島の人種学・気象学・歴

史に関する研究を出版した、J・J・J・コルニヤックの書物によって解決されることになる。以下は、ハーンがこの“one rare race-type”の箇所に付けた註である。

I subsequently learned the mystery of this very strange and beautiful mixed race,—many fine specimens of which may also be seen in Trinidad. There widely diverse elements have combined to form it: European, negro, and Indian,—but, strange to say, it is the most savage of these three bloods which creates the peculiar charm (Hearn, *F.W.I.*, 74)

これらの人々は、ヨーロッパ・ニグロ・インド人の要素が結びついて構成された人種であった。その中でも、「非常に不可思議で美しい」(“very strange and beautiful”)この混血人種の「特異な魅力」(“peculiar charm”)は、この三つの血の中で「最も野蛮」(“the most savage”)な血が創り出していたのだ。ハーンは小説『ユーマ』においても、混血女性のユーマが自分は奴隷であると自覚した後、彼女の中によみがえる血を「野蛮な人種」(“savage race”)のものだと描写している。ここからも、上の一節の「最も野蛮な」血は、ニグロの血を指していると考えて間違いないだろう。つまり、ハーンが最も美しいと見なした混血人種を創り出しているのは、ニグロの血だったのだ。ハーンが美しいと表象する混血人には、黒人の血が不可欠であった。これは、彼が黒人の血を、ひたすら否定的ではなく、肯定的にも捉えていたことの一つの証拠となる。あるいは、ジョルジュ・キュビエの人種三分類法から、彼がいかに逸脱していたかを示していると言えるだろう。

## 6. 内的人種表象

以下は、ハーンが二ヶ月間の取材旅行を終え、一旦西インド諸島から帰航した後に執筆した「真夏の熱帯行」の三十三章からの引用である。

Only now do the long succession of exotic and unfamiliar impressions received begin to group and blend, to form homogeneous results,—general ideas or convictions. (Hearn, *F.W.I.*, 72)

ハーンは、自分が受けた一連の異国的で珍しい印象が、集団をなし、混じり合い、一般的な思念や信念を形作っていることに、はじめて気付かされたという。彼は、西インド諸島の異国的で珍しい印象を、印象のままに終わらせることなく、自ら西インド諸島に赴き、そこで二ヶ月間を過ごし、自らの目で西インド諸島を見て体験した。そして彼は、西インド諸島の混血人種たちの社会問題にも目を向けていく。

Strongest among these is the belief that the white race is disappearing from these islands, acquired and held at so vast a cost of blood and treasure. Reasons almost beyond enumeration have been advanced—economical, climatic, ethnical, political,—all of which contain truth, yet no single one of

which can wholly explain the fact. Already the white West Indian populations are diminishing at a race that almost staggers credibility. . . . But with the disappearance of the white populations the ethnical problem would be still unsettled. Between the black and mixed peoples prevail hatreds more enduring and more intense than any race prejudices between whites and freedmen in the past. (Hearn, *F.W.I.*, 72-73)

前節では、ハーンによる混血人種表象のうち、その外見的な表象について見てきた。ハーンは単にクレオール女性を偏愛した作家であるとされることも多いが、混血人種の外形や表面的な部分だけを見ていたわけではない。植民地時代以後も残り続けるであろう混血人種のアイデンティティの葛藤にも、ハーンは注目していた。このような視点は、現代のポストコロニアリズムの立場にも一脈通じるところがあると考えられる。中村雄二郎は『述語集Ⅱ』の「クレオール」の項において、コロニアル時代に外からやってきた人間がそこに別の人間（奴隷）を投げ込んで、アイデンティティの成り立ちようもない残酷な新しい世界を作り上げた、このコロニアルの負の遺産の中から蘇生した人間こそが積極的な意味でのクレオールなのだとして述べている（中村雄二郎 1997：79-80）。ハーンが経験した西インド諸島の場合、植民地時代が終わり、仮に白人が一人残らずその地を去ったとしても、混血人たちの葛藤は消えることなく残り続けることになる。ハーンが注目した西インド諸島における混血人たちのこの心の葛藤は、まさに植民地主義が創り出した「負の遺産」に他ならないだろう。そして、この「負の遺産」から蘇生した人間こそが、中村雄二郎のいうように、クレオールなのだ。ハーンは、早くも19世紀末からこの問題に着目していた人間の一人と評価することができる。

前述のとおり、コンフィアンは、ハーンが同時代の人種的偏見から完全に自由ではなかったことをと指摘しているが、それと同時に、彼は同じ「まえがき」（“Lafcadio Hearn: The Magnificent Traveler”）で、以下のように述べている。

Hearn invented what today we might call “multiple identity” or “creoleness”—that is to say the assumption in daily existence, throughout the most common actions, of various cultural, racial, linguistic and religious components of oneself. (Confiant 2001: xii)

ハーンは、比較的早い段階で植民地の問題に目を向けていただけでなく、私たちが今日呼ぶところの「多重的なアイデンティティ」（multiple identity）ないしは「クレオール性」（creoleness）を創り出した人物であるというこの評価は、傾聴に値する。

ただし、「真夏の熱帯行」において、混血人種のこのような苦悩への言及が現れるのは、ほとんど帰航後の最終章のみに限られている。しかし、西インド諸島を実際に訪れ、二ヶ月間の滞在を通じて、ハーンに関心は混血人種の内的な部分にも向いてゆく。

ハーンの「西インド諸島における混血人種考」（“A Study of Half-Breed Races In the West

Indies”）」および「西インド諸島—肌色の多様なその社会 (“West Indian Society of Many Colorings”）」は、1890年出版の雑誌『コスモポリタン』(COSMOPOLITAN)に掲載された記事である。この二つの記事においてハーンは、混血人種の外見的な特徴ではなく、彼らの抱える問題や植民地における社会問題に論及している。

「西インド諸島における混血人種考」は、「フランス領西インド諸島における混血人種の歴史は、アメリカ植民史の中でも凄烈で興味深いものである」(1890)という一文から始まる。そして、混血人種の歴史はそれ単独で一つの歴史として研究されたことはなく、それは彼らが白人になろうとする奇妙な葛藤の物語を描いた植民地作家の作品から推測され、想像されるだけであったとハーンは述べる。このような状況を背景に、混血人種の歴史にフォーカスを当てること、それがこの記事のハーンの狙いとなる。一方、「西インド諸島—肌色の多様なその社会」では、西インド諸島の混血人種の肌の色が多様であるのと同様、この地域の社会問題にもまた多様で複雑な明暗と色調がある、とハーンは主張する。

未開人と文明人 (“savage and a civilized races” [Hearn, “Study of Half-Breed Races”, 221])、すなわちアフリカ人女性と白人の主人の間から生まれた混血の子どもたちは、この両者の和解のきっかけになることも考えられるが、西インド諸島ではむしろ、この混血人種が自分たちの親である白人・黒人の両人種の仲を永遠にこじらせる要因となったとハーンは考えていた。『仏領西インド諸島の二年間』の第二部「マルティニーク小品」に収められている作品である「有色人の娘」(“La Fille de Couleur”) で、ハーンは次のように述べている。

The history of the *hommes-de-couleur* in all the French colonies has been the same;—distrusted by the whites, who feared their aspirations to social equality, distrusted even more by the blacks (who still hate them secretly, although ruled by them), the mulattoes became an Ishmaelitish clan, inimical to both races, and dreaded of both. (Hearn, *F.W.I.*, 260-261)

ここでハーンは、白人からも黒人からも信用されず、両方の人種に敵意を抱き、両方の人種から恐れられた混血人種を、「イシュマエルの」であると述べている。イシュマエルは、旧約聖書にあるアブラハムと、その妻サラが所有する女奴隷ハガルとの間の子供で、正妻であるサラが身ごもった後は、母子ともに荒野に追いやられる。混血人たちが実際に植民地から追い払われたわけではないが、ハーンは、彼らが社会的に追いやられている状況を示唆しているのであろう。ちなみに、この「イシュマエル」の譬えは、「西インド諸島—肌色の多様なその社会」にも登場する。

Ishmael and Hager driven from the paternal roof have returned to banish Abraham and Sarah to the wildness. (Hearn, “West Indian Society”, 238)

ハーンはここで、イシュマエルを植民地における混血人に、ヘイガルを黒人に、アブラハ

ムとサラを白人に置き換えている。社会的に追いやられていた混血人は、白人と同権となると立場が一転し、今度は白人たちを荒野に追いやるために、黒人たちと手を取りあつたことが、この聖書の物語の引用に示唆されているのだ。この複雑な社会関係を踏まえ、彼は「奴隷制における最大の過ちは、混血人種を生み出したことだ」(“The greatest error of slavery was that which resulted in the creation of the mixed races.” [Hearn, “Study of Half-Breed Races”, 221])と主張している。

中村和恵は、「カラードの幻惑—『仏領西インド諸島の二年間』にみるハーンの人種観」において、この「奴隷制における最大の過ち」について次のように述べている。

当時この記事を読んだ人は、この「罪」の意識を、たんに奴隷制度と奴隷女性の性的搾取への反省としてではなく、黒人と混血することそのものが罪だという倫理観を前提にしたものとして理解したであろう。白人と黒人の結婚を禁じていたオハイオ州シンシナティで奴隷だった女性の娘と結婚したこともあるハーン自身の人生を考えれば、彼がこうした倫理観をほんとうに信じていたとはおよそおもわれぬ。(中村和恵 2009 : 139)

中村の言うように、「奴隷制における最大の過ち」とは、ハーンにとって、黒人の血が入った混血人種を生み出したことよりも、複雑な植民地問題、とりわけ、混血人種が置かれた困難な状況を生み出したことにはあつたのではないだろうか。黒人との混血そのものが罪であるという倫理観をハーンが持っていたとしたら、黒人の造形美や黒人文化に興味を示したハーン、混血の娘マティと婚姻を結んだハーンは存在していなかったことだろう。

## 7. おわりに

本稿では、ラフカディオ・ハーンが西インド諸島に滞在した 1887 年から 1889 年の二年間のうちでも特に初期に書かれた「真夏の熱帯行」を中心とし、テキストから彼の混血表象を分析・考察した。初期の作品である「真夏の熱帯行」では、彼は主に混血人種の外見的特徴やその美しさを、どちらかと言えば外からの視点で表象していたが、その後の作品では、その存在の内側へと入りこみ、植民地の社会問題や彼らの心の葛藤を描き出していったと言える。彼は、19 世紀末の西洋至上主義の時代に、西洋以外の社会に目を向け、植民地制度・奴隷制の問題や、それがもたらす様々な負の側面に早くから気づいていた。また、それだけでなく、植民地から失われてゆく混血人の生活や言葉、服装や文化などの実態や歴史、それらがもつ魅力も丁寧に描き、それは現在でも貴重な記録であり続けている。本稿は、ハーンのテキストから混血表象を分析・考察することのみに留まっているが、今後はポストコロニアリズムの観点から彼の作品をさらに再読・再検討し、ラフカディオ・ハーンの人と作品の全貌に迫っていきたい。

主要参考文献

- Confiant, Raphael. "Lafcadio Hearn: The Magnificent Traveler" *Two Years in the French West Indies*. New York: Harper & Brothers, 1890 (reprinted Massachusetts and New York: Interlink Publishing Group, Inc., 2001). ix-xii. Print.
- Hearn, Lafcadio. "A Midsummer Trip to the Tropics" *Two Years in the West Indies*. New York: Harper & Brothers, 1890 (reprinted Massachusetts and New York: Interlink Publishing Group, Inc., 2001). 1-74. Print.
- . "A Study of Half-Breed Races In the West Indies" *An American Miscellany by Lafcadio Hearn articles and stories now first collected by Albert Mordell volume II*. New York: Dodd, Mead and Company, 1924. 221-231. Print.
- . "La Fille de Couleur" in *Two Years in the West Indies*. New York: Harper & Brothers, 1890 (reprinted Massachusetts and New York: Interlink Publishing Group, Inc., 2001). 242-265. Print
- . "West Indian Society of Many Colorings" in *An American Miscellany by Lafcadio Hearn articles and stories now first collected by Albert Mordell volume II*. New York: Dodd, Mead and Company, 1924. 232-242. Print.
- . *Youma*. in *The Writings of Lafcadio Hearn volume IV*. Boston: Houghton Mifflin Co., 1922 (reprinted Tokyo: Rinsen Book Co., 1973). 259-371. Print.
- 石田博士「小泉八雲 生地ギリシャで注目」『朝日新聞』2014年8月6日朝刊。「文化」
- 小泉八雲 (1976) 『仏領西インドの二年間上』平井呈一訳. 恒文社, 1976.
- . 『仏領西インドの二年間下』平井呈一訳. 恒文社, 1976.
- 砂野幸稔「エメ・セゼール小論」『帰郷ノート／植民地主義論』エメ・セゼール著. 砂野幸稔訳. 平凡社, 2004. 189-262.
- 杉本淑彦「白色人種論とアラブ人—フランス植民地主義のまなざし」『白人とは何か? ホワイトネス・スタディーズ入門』藤川隆男編. 刀水書房, 2005. 60-70.
- 高瀬彰典『小泉八雲論考—ラフカディオ・ハーンと日本—』島根大学ラフカディオ・ハーン研究会, 2008.
- 恒川邦夫「西インド諸島で出会ったラフカディオ・ハーン—ハーン、ゴーガン、セガレン」『ハーンの人と周辺』平川祐弘・牧野陽子編. 新曜社, 2009. 50-97.
- 中野稔「第三の文化着目 先駆性で再評価」『日本経済新聞』2004年7月31日。「文化」
- 中村和恵「カラーズの幻惑—『仏領西インド諸島の二年間』にみるハーンの人種観」『ハーンの文学世界』平川祐弘・牧野陽子編. 新曜社, 2009. 127-155.
- 中村隆之『フランス語圏カリブ海文学小史』風響社, 2012.
- 中村雄二郎『術語集Ⅱ』岩波書店, 1997.
- ハーン、ラフカディオ「黒人の寄席演芸—ロー街の芸人たち」『ラフカディオ・ハーン著作集 第四巻』篠田一士/他訳. 恒文社, 1987. 138-144.

- - -. 「西インド諸島における混血人種考」『ラフカディオ・ハーン著作集 第一巻』平川祐弘/他訳. 恒文社, 1980. 419-428.
- - -. 「西インド諸島—肌色の多様なその社会」『ラフカディオ・ハーン著作集 第一巻』平川祐弘/他訳. 恒文社, 1980. 429-438.
- 西江雅之「ハーンと“クレオール”」『國文學：解釈と教材の研究』49.11 (2004) : 90-101.
- 平川祐弘『カリブの女』河出書房新社, 1999.
- - -. 「ハーンにおけるクレオールの意味—ルイジアナ、マルティニーク、日本」『ハーンの人と周辺』平川祐弘・牧野陽子編. 新曜社, 2009. 15-49.
- - -. 『ラフカディオ・ハーン 植民地化・キリスト教化・文明開化』ミネルヴァ書房, 2004.
- マルティネル、ルイ＝ソロ「マルティニークにおけるハーン評価の変遷」『ハーンの人と周辺』森田直子抄訳. 平川祐弘・牧野陽子編. 新曜社, 2009. 98-117.